

指導者（保護者）として大切にしたいこと（その43）

～「スポーツ暴力相談 最多に」～

2023年2月吉日
U12部会広島地区
SV 大庭 浩資

広島県バスケットボール協会U12部会広島地区の保護者の皆様、指導者の皆様、役員の皆様、いつもお世話になっております。

1月の後半に入り、広島地区のコロナウイルス感染者はやや減少傾向にあるとはいえ、それでも一日に1000人以上の感染者があります。

また先日は、広島県に「インフルエンザ注意報」が発令されました。

寒さもまだまだ続きそうですから、選手も指導者も日々の健康観察をこまめに行うとともに、体調管理には十分気を付けてほしいと思います。

さて、本年度は3年ぶりに「4年生大会」が開催されました。

初めてユニフォームを着る選手、初めて試合に出る選手、また助っ人で呼ばれて初めてバスケットボールに触れる選手がいるのも、4年生大会ならではの光景でしたし、とても微笑ましかったですね。

このまま、次の5年生大会、6年生大会が開催されるといいですね。

特に、2月18日・19日に行われる6年生大会において、広島地区の6年生全員が元気に出場し、これまで培ってきた練習の成果を十分に発揮してくれることを、心から願うばかりです。

ところで、先日、1月30日付の新聞に以下のような記事が載っていました。

「スポーツ暴力相談 最多に」

スポーツ界の暴力パワハラ問題で、日本スポーツ協会が設置した窓口への相談件数が2022年度は、過去最多の300超となる見通しとなった。

内訳で見ると、13年4月の「暴力行為根絶宣言」への契機となった柔道女子代表の暴力指導問題発覚から約10年で、殴る、蹴るといった暴力が減る一方、指導の現場では暴言が最多で増加傾向にあり、心に傷を負わせるような「陰湿化」の課題に直面する。

被害者は小学生が4割と最も多く、指導者に依存しがちな保護者への理解を求める指摘も出ている。

まずここで注目したいのは、暴力は減少したものの暴言が増え、被害者は小学生が4割と最も多いという点です。

広島地区でU12を指導している我々ミニバスケットボールの指導者としては、しっかり心にとめておく必要があるでしょう。

実は今回の新聞記事で、私が「ハッ!」とし、「もしかして、これは自分自身に当てはまるものではないか」と思ったのが次の記事なのです。

「もうバレーするな」「そんなんだからいつまでも小学生だ、幼稚園児だ」「使えない」など。

18年に自殺した岩手県立不来方高（矢巾町）の男子バレーボール部員は、県教育委員会から懲戒処分を受けた当時の顧問から暴言を浴び続けていた。

日本スポ協への相談内訳で22年度は暴力が14%に対して、暴言がパワハラ（無視、差別、罰走など）と合わせて6割超に上った。

禅問答のように問い詰め「おまえは頭が悪い」という例もあり、暴力等相談室の品治恵子係長は「証拠が残りにくい、証明しづらいものが増えている」と分析した。

また日本スポーツ法支援・研究センター理事の合田雄治郎弁護士は暴力等に及ぶ指導が、①子どものために暴力が良いことだと確信する『**確信犯型**』 ②適切な指導が分からず即効性のある暴力に訴える『**指導方法不明型**』 ③感情をコントロールできない『**感情爆発型**』 ④暴力行為を楽しむ『**暴力嗜好（しこう）型**』 の四つに分類できると説明する。

その中で10年前を契機に『**確信犯型**』から『**指導方法不明型**』シフトしていると分析。

調査では、「いけないと分かっているがやってしまった」という声も多く、部活動の地域移行が推進される中で「子どもを指導するのは相当なスキルが必要。教える側が研修等で常に勉強し続けることが重要だ」と警鐘を鳴らす。

練習や試合において、指導者が何をしたか、何を言ったかについては、今の時代、多くが記録に残されますね。

現代のDVDの画像や録音の音の鮮明さは、本当に驚くばかりで、この1年間で私自身も、試合で発する自分の声や内容をDVDで改めて聞いてみて、何度も恥ずかしい思いをしました（・・・笑い）。

ただそれを観たり聞いたりする限り、また試合会場においても、以前のような直接的な暴言は、明らかに少なくなっているように感じます（記録に残るから暴言が少なくなったのはいけないのですが）。

しかし、言葉そのものが以前とは違うものでも、姿や形を変えて「言葉の暴力」となり、子どもの心の傷として残っては何の意味もありません。

ここで、私自身の言動を思い起こしてみると、例えば「ボールを怖がるな」「歩かずに走れ」「せめて3分間、全力でプレイできないと（体力をつけないと）」「しっかり頭を使い、考えてプレイしなさい」「同じ失敗を何度も何度もしないで、しっかり学習しなさい」などなどの言葉があります。

それらも今思えば「試合に出せない、試合で使えない」「頭が悪い」という言葉と同じような意味合いで選手に伝わっていたとしたら、まさに心に傷を負わせていたと思います。

また、自分の指導方法も、何とか少ない練習時間の中で「試合に勝ちたい、試合で勝たせてやりたい」と思う余り、まさに即効性のある（と思われる）『**指導方法不明型**』に走っていたのではないかと考えさせられました。

指導者の皆様からは「そんな事をいちいち気にしていたら、指導なんかできない」という声が聞こえてきそうです。本当にその通りかもしれません。

私自身、このコラムにおいて、それぞれのチームや指導者の指導方針に対して、何か特別なことを言いたいわけでもありませんし、言う立場でもありません。

ただ一つお伝えしたいのは、「これからの時代の指導においては、指導者がチームや選手の実態をしっかりと把握し、そしてチームを陰から支えてくださる保護者と指導方針を共有するとともに、常日頃からこまめに情報交換を行い、何か課題があったら迅速に対応するのが良いのではないか」ということです。

そして、スポーツの世界に（広島地区は該当しないと思いますが）、現実として暴言や暴力が存在する限りは、これからの指導において、それぞれの指導者が、今一度襟を正して、目の前の選手と向き合う必要があると思います。

日本スポ協などが23年度に実施する再発防止事業のメインターゲットは保護者と子どもだ。

「問題が根強いのは、たたく指導者を擁護する保護者がいること」と合田弁護士。

全国大会出場などの実績に目を向けるあまり、指導者の判断に任せ、子どもを含めて暴力的指導に事実上まひしているケースがあるという。

日本体育大学の南部さおり教授は「ハラスメントへの意識は浸透してきたが、変わらない指導者もやはりいる。子どもの場合、理屈で諭すより手っ取り早く怖がらせたり、嫌な思いをさせたりして、自分の思い通りにコントロールしやすい」と指摘。

子どもが成長し、指導者となった際に負の連鎖を断ち切るためにも、品治係長は「小さな芽からつぶしていかなければいけない」と強調した。

指導者について言うと、私自身が指導した選手で指導者にもなっている方もいらっしゃいます。

以前は同じチームで共に勝つことを目指してバスケットボールをした者が、今は相手チームのコーチとして、敵と味方に分かれて対戦するのも、とても嬉しいもので、指導者冥利に尽きます。

またこれから指導する選手の中から、どんどん指導者が出てきてほしいとも思います。

そのためにも、これからもバスケットボールが好きになる選手がどんどん増えるような指導をお互いに心がけたいものですね。

※ 今回のコラムは、これまでも増して、自分自身の本音で思いを書かせていただきました。

また、試合会場等で、いろいろな考えを聞かせてくだされば幸いです。どうぞよろしく願いいたします。